

た内在的な意識とは区別された超越的な意識である。本発表では、このような絶対意識の充実態の一つである信仰の立場に注目し、そうした信仰と信仰の交わりの問題がどのようなものとして考えられているのかを明らかにしたい。

考察の手順としては、まずこうした絶対意識の充実態の一つである信仰がどのようなものとして考えられているのかを明らかにし、そこからこうした信仰が他の信仰との交わりに対して開かれた性格を持つものであることを提示する。そして次に、ヤスパースが絶対意識論とは別の箇所で語っている「信仰と信仰の対立」という問題について触れ、こうした信仰と信仰の対立がその内容からして「信仰と信仰の交わり」として理解可能であることを提示する。最後に、このような信仰と信仰の交わりが、ヤスパース哲学の根本概念である実存的交わりとしての「愛の闘争 (liebender Kampf)」と同じ性格を持つことを指摘し、信仰と信仰の交わりがその内容から見て実存的交わりとしての愛の闘争の問題領域に引き入れられるものであることを明らかにする。

以上のような諸考察を経て、前期ヤスパースにおける信仰と信仰の交わりの問題がどのようなものとして考えられているのかが明らかになるとともに、またそこに後期ヤスパースの宗教哲学的な思索の萌芽も同時に見て取られることになるであろう。実際に、哲学と宗教の問題に関するヤスパースの思索は、後期の著作『啓示に面しての哲学的信仰』（一九六二年）において頂点に達し、そこでは両者の信仰が互いに出会い得る可能性が探求されているが、こうしたヤスパースの思索の姿勢は本

発表で問題にしている信仰と信仰の交わりという、前期における思索から一貫したものであったのである。

ヤスパースとブルトマン

岡田 聡

ブルトマンがはじめて「非神話化」を提唱したのは、一九四一年の講演、「啓示と救済の出来事」においてである。そしてそれは同年、論文「新約聖書と神話論」として発表された。非神話化は戦後、哲学者によっても取り上げられるにいたった。その代表的なものが、ブルトマンとの論争の発端となった、ヤスパースの一九五三年の講演、「ブルトマンの非神話化の真理と災い」である。ヤスパースは、ブルトマンの非神話化のどこに、災いを見出すのか。本発表は、両者の「啓示」をめぐる議論を手がかりとして、それを明らかにする。

ヤスパースによれば、自らとブルトマンを分けるのは、啓示思想への立場である。ヤスパースは啓示思想を批判して、次のように述べる。「神が、ある処である時に、一回限りあるいは一連の行為によって、自らを局在化した」ということは、世界の中で神を客観的なものへ固定化してしまう信仰である。」

ブルトマンはその批判に対して「まったくそのとおりだ」と答えたうえで、次のように述べる。「ヤスパースは、私がまさにそうした神の客観的なものへの固定化に対して闘ったということを知らないのか。」

ブルトマンにとってキリストの十字架は、客観的な出来事ではなく、主體的な、そのつどいまここで出来る出来事である。ブルトマンは、ヤスパースへの返答の中でも、「啓示とは教説の伝達ではなく、…そのつどの私への神の直接的な呼びかけである」と主張する。

ヤスパースは啓示を、「神が自らを、言葉・要求・行為・出来事を通じて、直接的に、特定の時に、すべての人間に妥当するしかたで告知すること」と理解している。

しかしこの啓示理解は、そもそもブルトマンの啓示理解とは相容れないのである。ブルトマンは言う。「そのつどの一人の人間への語りかけがあり、その中で神が…ここでいま私に語りかける私の神として現れるということが…受肉論の非神話化された意味である。」

ヤスパースは、人間は、この私にのみまたこの歴史的一回的な瞬間にのみ立ちあらわれる「暗号」を通じて、神に係るという。それゆえヤスパースとブルトマンは、そうした信仰の歴史的一回性を強調する点では、実際にはかけはなれてはいないのである。

しかしながらヤスパースは、こうしたブルトマンの返答を、再批判する。「神の呼びかけは新約聖書の言葉に、それゆえ一つの全く固定化された客観性に、結びついている。…このことは、客観的な固定化の解消というあなたの意図に矛盾している。」

なるほどブルトマンの主張によれば、啓示は、主體的な、そのつどいまここで出来る出来事である。しかしブルトマンに

おいては、その啓示は「約一九五〇年前のかの奇跡」にもとづいており、また、本来的な自己の実現への決断は「原始キリスト教徒たちの口を通じての神の『語りかけ』への決断へと特殊化される」。その点で、ブルトマンの非神話化には、「一つのことが全く客観的なこととして残っているのである」。そしてその一つのこととは、「ケリュグマ」、つまり「キリストにおける神の決定的行為についてのメッセージ」(ブルトマン)に他ならない。ヤスパースはこのように、ブルトマンの非神話化に、さらに非神話化されなければならない神話的な残滓を見出すのである。